

「主観性」の文法的定義と直示中心

デロワ^{なかむらやよい}中村弥生

仏国立東洋言語文化大学・フランス東アジア研究所

Institut national des langues et civilisations orientales (INALCO)

Institut Français de Recherche sur l'Asie de l'Est, Inalco, Université de Paris, CNRS, F-75013, Paris

一般言語学において言語の主観性が関心を集め、日本語学においても近年多くの研究が発表されている。日本においては早くから松下大三郎、時枝誠記、金田一春彦による「主観的表現」についての議論があったことは周知の通りであるが、一方で、「主観性」あるいは「主観的」という概念が漠然としていて術語として文法的な位置付けがなされていないといった理由から日本語研究においては批判されることも多い。このような現状を踏まえ、本発表は話者とは異なる「直示中心 (deictic centre)」の概念を用いた「主観性表現」の文法的定義を提案し、複文構造や談話レベルにおける直示中心の移動という概念を用いて主観性述語の人称制限が無化する現象などを分析する。また、これまで同様の現象を分析するのに多く用いられてきた視点という用語についてその問題点を指摘する。

1. 言語学研究における主観性・主体性

一般言語学において、「主観性」や「主観性表現」の定義が研究者により異なることはよく指摘されている。言語の主観性について論じた初期のものとしてフランス人言語学者バンベニストの「言語における主観性について (De la subjectivité dans le langage)」(Benveniste 1958) がよく挙げられるが、この論文は言語における「主観性」を表す形式の認定や定義を目的とする論文ではない。「エゴと言う者がエゴである (Est ego qui dit ego)」という一節からも分かるように、この論文でバンベニストが主張しているのは、言語は人間の「主観」を形成する基盤そのものであるということであった。ただし、言語が「主観」の基盤たり得るのは、言語が「主観」を表現できる手段を持っているためであると考え、直示表現や時間表現をその例として挙げた。現代の主観性に関わる主要な言語学研究としては Langacker (1985) や Traugott (1989) がよく挙げられる。両者とも話者を概念定義の中心におく点では共通しているが、認知言語学の枠組みで「subjectivity (澤田 2019 では「主体性）」を考えるラネカーは「私の定義では、ある表現ないしはその意味がどの程度 subjective (主観的) であるかということは意味を持たない。すなわち、ある特定の要素がその場面全体の内部でどう捉えられているのかについて云々することしかできないのである」(澤田 2019 訳) としている。

2. 意味素性としての主観性

このようなラネカーの立場に反し、われわれは「主観性」という特性が語の意味素性に刻まれていると考える。これは日本語には「主観性述語」(益岡 1997) など語の意味素性として「主観性」という特性を持つと考えられる語が存在するからである。「主観性述語」とは、とくに感情形容詞やオノマトペを含む動詞 (Aoki 1986) である。

言語の主観性に関する議論に対する批判の一因には、池上 (2004) の指摘するように話者が主体的に事態を把握し言語化する言表はすべて主観的であると言えるという点がある。特に形容詞は、知覚に基づく表現であり、山岡 (2000) はすべて主観的であるとした。Kerbrat-Orecchioni (1999) のフランス語の発話研究においても同様の解釈が見られる。しかしながら、山岡 (2000) は、感情形容詞と属性形容詞との違いを「知覚共有の信念」の有無によって説明づけた。これは、同じ教室にいる生徒は、「黒板が黒い」という知覚を共有していると信じることはできても、誰かの「歯が痛い」ことは共有できないという違いである。感情形容詞は、すなわち知覚共有が不可能な真に主観的な経験を表現する語と言える。

3. 主観性述語

これら感情形容詞を中心とした主観性述語の特性は上記のような意味的なレベルにとどまらない。これらの語には人称制限とよばれる文法的制約があり、主体を一人称に制限することが知られている (西尾 1972, Kuroda 1973)。この人称制限は、述語が [経験主体=話者] という意味素性を持つと言い換えることができる。例えば、意味素性 [経験主体=話者] を持つ述語「欲しい」が「私」を経験主体とした (1) a. は、述語の意味素性と対応するため文法的で、「花子」を経験主体とした (1) b. は述語の意味素性と対応しないため非文法的となる。そして「がる」や証拠性マーカーなど [経験主体≠話者] という意味素性を持ち人称制限を変換させる形式を付加し有標化することで、(2) のように「花子」を主体とした文を形成することができるようになる。

- (1) a. 私は大きい家が欲しい_[経験主体=話者]。 (経験主体=「私」=話者)
 b. *花子は家が欲しい_[経験主体=話者]。 (経験主体=「花子」≠話者)
 (2) 花子は家を欲しがっている_[経験主体≠話者]。 (経験主体=「花子」≠話者)

しかしながら、実際にはこの規則を否定する反例が数多く存在する。その最たるものが(3)のように従属節において主体が一人称にもかかわらず、述語が「欲しがる」という有標形式で形成されたものである (すべてインターネット検索により収集した用例)。

- (3) a. 母は [私がずっと (それを) 欲しがっていた] のを知っていました。
 b. [私が早いうちからマイホームを欲しがっていた] のに対し夫は消極的でした。
 c. [私が (それを) 欲しがっていた] から (娘が) 次の日に一人でまた〇〇町まで行って買ってきてくれた。
 d. [私が欲しがっていた] 腕時計を彼氏がプレゼントしてくれた。

そこで、人称制限は経験主体を一人称で表現される話者に制限するものではなく「直示中心」に制限するものであり、[経験主体=直示中心] という意味素性を持つと考える。直示中心とは、直示表現の意味を決定する基準となる点である。すべての発話は、直示中心を備えており、それは発話場面に常に存在する唯一の要素である話者に初期設定されている。しかしながら、Bastonnais (2000) でも主張されているように、直示中心は環境により移動する¹。そして、上にあげた例のような従属節における直示中心は、主節の主体に移動すると考えるのである。(3) a. では、従属節において直示中心は

¹ 直示中心の移動を用いた研究には、他に、メンタルスペース理論の枠組みで時制研究を行った井元 (2010) などがある。

主節の主体である「母」に移動しており、述語「欲しがる」の意味素性 [経験主体≠直示中心] と一致することになる。

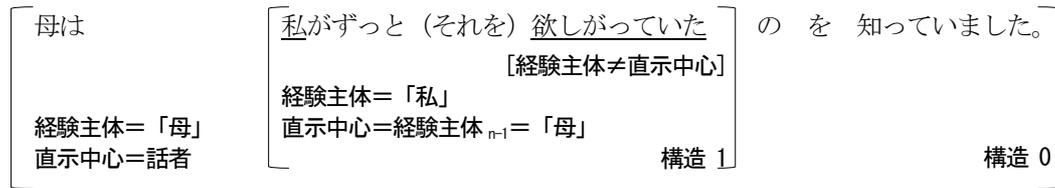


図1 複文構造における直示中心の移動

4. 直示中心を用いた主観性表現の文法的定義

この直示中心に規定される意味素性を用いて、主観性表現を「直示中心がパラメータに設定された意味素性を持ち、解釈に直示中心が介入する表現」と文法的に定義することが可能となる。ここで注意しなければならないのは、この定義による主観性表現とは当然のことながら話者の主観を表す表現ではなく、「直示中心」の主観を表す表現となる。よって、いわゆる言語の主観性として語られる話者の主観的・主体的な表現は、直示中心が話者に置かれた状況でこれらの主観性表現が使用された場合ということになる。

この定義によると、直示表現はもちろん、例えば、「来る」という動詞は移動の方向が直示中心となる素性を持つことから、「くれる」は恩恵の受け手が直示中心であることから主観性表現に分類される。

(4) 主観性表現

- a. 感情形容詞： 悲しい [経験主体＝直示中心]
- b. 移動動詞： 来る [移動の方向＝直示中心]
- c. 授受動詞： くれる [受け手＝直示中心]

主観性表現には例文(5)の「ズキズキと」のような副詞も含まれる。Aoki (1986) は「ズキズキと」が三人称主体と共起しないことを指摘している。しかしながら、この非文法性は、主体のタイプ以前に「ズキズキと」の意味素性と「がっている」の意味素性とが(5)に示されるようにそもそも両立不可能であることによるものといえる。

(5) *花子は 頭が ズキズキと_[経験主体＝直示中心] 痛がっている_[経験主体≠直示中心]。

ラネカーが主体性について言及した際に使用しよく引用される例(6)もこの直示中心を用いた意味素性によって文法的に説明ができる。ラネカーによれば、これらの主体性は a < b < c であるとされる (Langacker 1985:140-141)。

- (6) a. Ed Klima is sitting across the table from Dave Perlmutter!
- b. Ed Klima is sitting across the table from me!
- c. Ed Klima is sitting across the table!

(6)'はラネカーの使用した例に類似した日本語例である。直示中心を用いた定義によると、「向かい」は [正面＝補足語または直示中心] という素性を持つ条件的主観性表現である。前文脈なしで(6)'が発話された場合、直示中心は話者である。補足語がある(6)'a. では「正面＝花子」、(6)'b. では「正面＝私」となり直示表現を含む(6)'b. がより主観的となる。補足語がない(6)'c. では解釈が「正面＝

直示中心」つまり「正面＝話者」となり、もっとも主観性の高い用法となる。ラネカーの言葉を借りればこれは主体的な事象の捉え方をした表現ということになるが、この表現の主観性の高さは文法的にも説明が可能ということになるといえる。

- (6)' a. 太郎は 花子の向かいに 座っている。
- b. 太郎は 私の向かいに 座っている。
- c. 太郎は ∅ 向かいに 座っている。

5. 談話レベルにおける直示中心の移動—小説を例に

直示中心の移動は複文構造内の同一文中のみならず、談話のレベルでも起こる。Kuroda (1973) は小説などで感情形容詞の人称制限の無化が起こることを指摘し、人称制限が無化したテキストを非報告文体 (non reportative style) とよび、通常の発話における報告文体 (reportative style) と区別した。この人称制限の無化の現象も直示中心の移動によって説明することができる。

小説の初期設定では、直示中心は語り手に置かれている。しかしながら、作者は直示中心を語り手から登場人物に移動させることができる。小説には直示中心が移動、あるいは固定されたことがさまざまな言語現象を通して観察できる。

(7)は重松清「陽だまりの猫」の抜粋である。(7)a. は冒頭第二文で、描写場面に人物が現れ、直示中心が語り手からその人物「みどりさん」に移行し、固定する。その後の文で経験主体がみどりさんの夫である「伸雄さん」の文(7)b. では述語が「経験主体≠直示中心」という意味素性を持つ証拠性マーカー「ようだ」で有標化されているのに対し、「みどりさん」の文(7)c. では主観性述語が無標形式で使われている。そして、最初の段落の最後の文(7)d. で読者は「みどりさん」は直示中心が初期設定されていた語り手と同一人物であることを知る仕掛けになっている。

- (7) a. [...] 『赤毛のアン』に出てくるようなピクニックセットを買った日、みどりさんたちはマイホームを手に入れた。 (直示中心：語り手→「みどりさん」)
- b. 伸雄さんは来月から二十五年もつづくローン返済のことが気になってしかたがないようだった[経験主体≠直示中心]。
- c. たぶんそうだろうな、とみどりさんも思う[経験主体＝直示中心]。
- d. みどりさんは、あたしだ。 (「みどりさん」＝語り手)

このように直示中心が語り手からある人物に移動した後、その人物に固定されることは多い。(8)は宮部みゆき「勝ち逃げ」の冒頭である。「浩美」が登場し、直示中心が語り手から「浩美」に移動すると、直示中心は最後まで「浩美」に固定される。

- (8) [...] 佐山浩美は喪服を買いに出かけた。 (直示中心：語り手→「浩美」)

直示中心が「浩美」に固定されていることは、他の登場人物の呼称からも窺える。すべての主要登場人物の呼称に(9)で示すように家族関係を表す親族名称が使用されているが、親族名称はある基準のもとに意味が決定する対立名詞である。その基準は、談話の結束性の原理から考えて直示中心に置かれなければならないはずである。そして、この物語においてその基準はつねに「浩美」であり、直示中心が固定されていることが分かる。

(9) 直示中心＝「浩美」

- a. 伊佐子（浩美の母）＝直示中心の母＝「母」
- b. 勝子（伊佐子の姉）＝直示中心の伯母＝「伯母」
- c. 勲（伊佐子の兄）＝直示中心の伯父＝「伯父」
- d. 奈津子（伊佐子の姉）＝直示中心の伯母＝「伯母」
- e. 真喜子（伊佐子の妹）＝直示中心の叔母＝「叔母」
- f. 順次（真喜子の夫）＝直示中心の叔父＝「叔父」

しかし、このように直示中心が常に一登場人物に固定されるわけではなく、多数の人物に移動することもある。志賀直哉「小僧の神様」は10章からなるが各章の冒頭で主要人物である「仙吉」か「A」のどちらかに直示中心が移動する。(10)は第一章の冒頭で直示中心が語り手から「仙吉」に移動する。その後、仙吉が主体となる主観性述語は(10)b.のように証拠性マーカーを伴わない無標形式であられる。(11)は第三章の冒頭で直示中心が語り手から「A」に移動し、「A」が主体となる主観性述語は(11)b.のように証拠性マーカーを伴わない無標の形式であられる。そして、(11)c.における主観性表現である「来る」の使用からも直示中心が「A」にあることが分かる。

- (10) a. 一 仙吉は神田のある秤屋の店に奉公している。(直示中心：語り手→「仙吉」)
b. 仙吉は早く自分も番頭になって、そんな通らしい口を聞きながら、勝手にそういう家の暖簾をくぐる身分になりたいものだと思った_[経験主体=直示中心]。

- (11) a. 三 若い貴族議員のAは同じ議員仲間のBから[…]と説かれた。
(直示中心：語り手→「A」)
b. Aはいつかその立ち食いをやってみようと考えた_[経験主体=直示中心]。
c. そのとき不意に横合いから十三、四の小僧が入って来た_[移動の方向=直示中心]。

(12)は第六章の冒頭であるが、「A」が「客」と表現されていることから直示中心が「仙吉」に移動していることが分かる。また、移動動詞の例(12)b. c.や感情形容詞の例(12)d.も直示中心が「仙吉」に置かれていることを示している。

- (12) a. 六 客 [=A] は加減をしてぶらぶらと歩いている。(「A」＝直示中心の「客」)
b. […] 客は仙吉を待たせて中へ入って行った_[移動の方向≠直示中心]。
c. […] といって客は出て来た_[移動の方向=直示中心]。
d. [仙吉は] しかし何しろ嬉しかった_[移動の方向=直示中心]。

テキストのタイプによっては、より自由に直示中心が語り手と各登場人物の間を行き来する。(13)は司馬遼太郎『最後の将軍』の冒頭であるが、直示中心は語り手にとどまり、述語は語り手の推量を示す形をとっている。

- (13) 人の生涯は、ときに小説に似ている。主題がある。
徳川十五代将軍徳川慶喜というひとほど、世の期待をうけつづけてその前半生を生き
た人物は類がまれであらう_[経験主体=直示中心]。

(14)は第一章の最後の部分である。「斉昭」に置かれていた直示中心が、(14)e.で心中吐露の引用文と共に「正弘」に移っている。そしてすぐにまた語り手へと移動し、語り手の推量を示す主観性表現で章が閉じている。

- (14) a. 斉昭は伊勢守阿部正弘を、そう思った[経験主体=直示中心]。[…]
- b. この年若い幕閣の首班が、自分に対しこういう微妙な方法で手をさしのべてきていることを意外におもった[経験主体=直示中心]。
- c. 「よろしかろう」
- d. と、斉昭は、家老をして受諾の返事をした。
- e. (はたして。――) と、正弘は[…]ことをひそかによるこんだ[経験主体=直示中心]。
- f. […]斉昭の期待が風聞を生み、その風聞が慶喜をおもわぬ運命の場所へはこんだというべきであろう[経験主体=直示中心]。

直示中心の概念は、このように、テキスト分析において客観材料としての文法現象をさらに活用することを可能にする有用な手段であると言える。

6. 「視点」という概念の問題点

以上に述べてきた現象はこれまでも「視点」という概念を通して多く議論されてきた。本発表では「視点」という概念そのものの持つ問題を回避するために、敢えてこの用語の使用を避け「直示中心」の有用性を主張した。最後に「視点」という概念の問題点について具体的に指摘する。

この用語の問題は多義性にあり、用語の多義性とは多くの場合、概念の輪郭が正確に捉えられていないことによる。視点に関わる先駆的な研究として久野 (1978) が挙げられるが、澤田 (2011) は言語研究においては久野の「共感的視点」と「直示的視点」を区別し、ダイクシス表現は直示的視点から分析されるべきであると主張する。では、なぜこのような2つの異なる定義が生まれるのか。それは、全く別の概念が混同されていることによる。久野は視点について、話者が出来事を捉えるにあたりどこにカメラを置くかというカメラアングルに例えている。そして、「太郎が花子を殴った」という出来事を花子寄りのカメラアングルで捉えると「花子は太郎に殴られた」となるという。しかし、花子寄りにカメラが置かれた場合、この出来事を表現する日本語文は「太郎が殴ってきた」なのではないだろうか。カメラからある出来事を描写する場合、捉え方に関わるのはカメラそのものの位置だけではなく、カメラの焦点の位置も重要となる。澤田は共感的視点ほどの参加者を「主題として言語化するのか」に関わる視点であると主張しているが、これはカメラの撮影に例えるなら、カメラをどこに置くかではなく、カメラの焦点を誰に当てるかによるものといえるのである。

澤田の直示的視点は、本発表の直示中心と大きく類似した概念である。そして、直示中心の移動と同様の現象を、野田 (1995) はこの直示的視点と同様の概念を「現場依存の視点」と「文脈依存の視点」に区別することによって説明している。「現場依存の視点」は直示中心が話者に設定された状況であり、「文脈依存の視点」は話者から他へ移動した状況であると言い換えられる。しかしながら、この2つの区別では小説などのテキスト分析において問題が生じる。新美南吉『ごんぎつね』を例に考察しよう。この話は、冒頭で「ごん」が登場すると、それ以降は「ごん」の目線で出来事が捉えられる。「ごん」に直示中心が設定されていることになるが、野田の用語を用いるならば、「現場依存の視点」の基準が語り手から「ごん」に移り、その後は主節が「ごん」におかれた「現場依存の視点」で語られ、従属節は「文脈依存の視点」に基づくということになる。(15)は後半の一節である。(15)b. は「ごん」から遠ざかる移動であり、(15)c. は「ごん」に近づく動きである。これらは、「ごん」に

置かれた「現場依存の視点」により分析が可能である。

- (15) a. ごんは、「おねんぶつがあるんだな。」と思いながら井戸のそばにしゃがんでいました。
b. しばらくすると、また三人ほど、人がつれだって吉兵衛の家へはいっていきました。
c. お経を読む声が聞こえてきました。

しかしながら、語り手の聞き手に対する敬意を示す文末の「ます」を分析するには、既にある2つの視点に加えさらに「語り手の視点」を加えなければならない。そして、それにより物語は常に2つの視点から語られるという矛盾を生むことになる。直示中心の移動は、話者・語り手はそのまま残し、直示中心のみが移動するので、このようなテキスト構造の分析にも対応でき、汎用性が高いといえる。

7. 結び

本発表では、話者とは異なる「直示中心 (deictic centre)」の概念を用いた「主観性表現」の文法的定義を提案し、複文構造や談話レベルにおける直示中心の移動という概念を用いて主観性述語の人称制限が無化する現象などを分析した。また、これまで同様の現象を分析するのに多く用いられてきた視点という用語についてその問題点を指摘した。直示中心の移動という操作により、話者・語り手はそのまま残し、直示中心のみを移動させることで、人称制限が無化する現象などを分析することができる。直示中心という概念はテキスト構造の分析にも対応でき、汎用性が高いといえる。今後は直示中心とその移動によって分析可能な現象とそうでないものをより詳細に調査し、その理由やメカニズムを解明したい。

調査資料

- 志賀直哉「小僧の神様」志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎『少年少女日本文学館 5 小僧の神様・一房の葡萄』講談社、2009、9-28
重松清「陽だまりの猫」『見張り塔からずっと』新潮文庫、1999、153-253
司馬遼太郎『最後の将軍』文春文庫、1997
新美南吉『日本の童話名作選 こんぎつね』偕成社、1986
宮部みゆき「勝ち逃げ」『地下街の雨』集英社文庫、1998、135-183

参考文献

- Aoki, Haruo (1986) Evidentials in Japanese. In Wallace Chafe and Johanna Nichols (eds.), *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*, Ablex Publishing Corp, pp.223-238.
Benveniste, Emile (1958) De la subjectivité dans le langage. *Journal de Psychologie*, repris dans *Problèmes de linguistique générale*, 1, Gallimard, 1966.
Bastonnais, Emmanuelle (2000) Où viens-tu? La transposition du centre déictique. *Revue québécoise de*

linguistique, vol. 28, n° 2.

Kerbrat-Orecchioni, Catherine (1999) *L'énonciation*. Armand Colin.

Kuroda, Shigeyuki (1973) Where epistemology, style and grammar meet: A case study from the Japanese. In: Kiparski, P. and Anderson, S. (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, 377-391. Holt.

Langacker, Ronald W. (1985) Observations and speculations on subjectivity. In *Iconicity in syntax*, John Benjamin.

Traugott (1989) On the rise of epistemic meanings in English: an example of subjectification in semantic change. *Language*, 65, 31-55.

池上嘉彦 (2004) 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標」『認知言語学論考』No.3, 2003, 1-50

井元秀剛 (2010) 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房

久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館

澤田淳 (2011) 「日本語ダイクシス表現と視点, 主観性」澤田治美 (編) 『主観性と主体性』ひつじ書房

澤田治美 (2019) 「序論」澤田治美, 仁田義雄, 山梨正明 (編) 『場面と主体性・主観性』ひつじ書房

西尾寅弥 (1972) 「形容詞の意味・用法の記述的研究」『国立国語研究所報告』44, 秀英出版

野田尚史 (1995) 「現場依存の視点と文脈依存の視点」仁田義雄 (編) 『複文の研究』くろしお出版

益岡隆志 (1997) 「表現の主観性」田窪行則 (編) 『視点と言語行動』くろしお出版

山岡政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』くろしお出版